

## 分科会B: 座長所見 —— 映像を通じたオーストラリア教育

福嶋輝彦 (桜美林大学)

この度第2回 Teach Australia —— オーストラリアを教える先生のための実践ワークショップ —— の分科会B「オーストラリアの社会・生活を教えるには —— 映像を使つての教授法 ——」で、司会を務める機会を与えられた。普段授業であまり映像を使うことのない筆者だが、それだけに専門家が教室でどのように映像を駆使しているのか、個人的にも興味深かった。そこで、大学でオーストラリア全般について教える一教師として、司会をしながら感じたことについて、以下に述べていきたい。

そもそも映像を使ってある外国について教えようとするとき、日本と比べて異なる点、あるいは日本人にとって珍しい点を見せるのが定石であろう。その場合、多くの学生にとって、その外国、ここではオーストラリアの映像を見るのは初めてかもしれない。ここで教える側が気をつけていないと、その過程の中で、無意識のうちに学生にオーストラリアについてのある種のステレオタイプを植えつけてしまう危険がある。外国について教えるとき、われわれ教育者はそのようなリスクを常に認識しておく必要がある。

本分科会で基調講演をしてくれた二人の報告者は、日常の授業の中でステレオタイプを外国人学生に刷り込んでしまうリスクに直面しながらも、映像を使ってオーストラリアについて効果的に教育する手法について示唆に富む事例を紹介してくれた。最初にオーストラリア映画に描かれたアボリジナル像を採り上げたメルボルン大学のケイト・ダリアンスミス助教授は、ステレオタイプのリスクを極小化するためには、何よりも映像観覧後の学生とのディスカッションが重要であると指摘した。実際に会場で上映された *Jedda* は、ウェスタンオーストラリアの白人農場主の養女であるアボリジナルの少女が、白人と同様の満たされた生活と自らのアイデンティティとの間の葛藤に悩む姿を映していた。このような繊細なテーマを扱った映画が制作されたのが1955年であることを知らされ、「こんな早い段階でアボリジナルの心の葛藤を描いた作品などあるはずがない」という、活字資料から安易に導き出してしまったバイアスを、筆者自身が無意識のうちに抱いていたことを思い知らされたのである。

冷水を浴びせられたような気分で次の *Beneath Clouds* を見ていると、主人公のアボリジナルの少年と警官との暴力沙汰や、彼と旅をする外見は白人だがアボリジナルの血を引く少女の複雑なアイデンティティの問題といった、「お馴染み」のテーマに加えて、筆者の穿ち過ぎかもしれないが、もう一つのテーマを垣間見ることができた。二人がある断崖の傍を通るときに少年が、「ここで先祖が殺された」とつぶやくが、画面に拡がる荒涼としたいかにもオーストラリアらしい断崖の風景を目の当たりにして、過去のアボリジナルの虐殺への告

発だけでなく、「これらの土地はアボリジナルのものだ」という制作者の強烈なメッセージを嗅ぎ取ったのは筆者だけであろうか。不気味なまでに壮大な自然という単純な構図を通じて、オーストラリアの大地が孕む神秘性を訴えかけようとする手法は、著名なピーター・ウィア監督に通じるものがあるが、この映画を制作したアイヴァン・セン監督自身がアボリジナルであることを考え合わせると、断崖の風景の場面で、敢えて荒涼さを前面に押し出すことによって、土地にこめるアボリジナルの熱い思いを伝えようとしているように受け取られたのである。

しかしながら、こうした大地とアボリジナリティといった問題は、大都市に居住する多くのオーストラリア人にとっては、必ずしも日常の世界ではない。映像はそうした非日常の世界だけでなく、日常の世界の様子を外国人学生に伝えるうえでも有効であろう。筆者もキャンベラ在住時に、「寅さん」シリーズ大好きというイギリス系の女子学生と知り合ったが、彼女の清楚で生真面目なイメージからはおよそかけ離れたような映画をなぜ好きなのか訊いてみたところ、サムライなどのエキゾチックな日本ではなく、現代のふつうの日本人の生活を覗き見ることができるからと答えられ、逆に納得させられてしまった記憶がある。第二の講演者であるグリフィス大学のアルコム・アレキサンダー博士が教室で日頃実践しているのは、まさにふつうのオーストラリア人の生活の様子を伝えることである。ここで同博士は、*Looking for Alibrandi* という、シドニーのイタリア系の高校生の少女の物語を採り上げた。圧巻は少女も参加した高校生スピーチ大会のシーンで、彼女の実直なスピーチと、それを優しく称える同じ高校の優等生で親が自由党上院議員の少年、そして彼女に続いてスピーチに登壇する公立高校代表のいかにも労働者階級出身と見られる少年、と現代の都市部のオーストラリアが凝縮されている光景であった。特に最後の少年は、シニカルな態度で粗野な言葉遣いながらも、物事の本質を鋭く衝いたスピーチを一席ぶち上げ、観客の拍手喝采を一身に集めた。いかにも反権威主義のオーストラリア人に受けそうなキャラクター、と筆者も妙な懐かしさを覚えたほどである。

もっとも、フロアからは「オーストラリアらしさとは何か」という、単純ながらも難しい質問がいくつか寄せられ、二人の講演者ともに鋭い問いかけに強い感銘を受けていた。歴史とは歴史家が書いた文化的所産であると E. H. カーが指摘するように、一人一人の教師が教室で紹介するオーストラリアも、その教師自身のフィルターを通じて取捨選択されたオーストラリアにほかならない。このことはオーストラリアに限らず、いずれの国、あるいは社会事象を教える際にも共通する問題点であろう。その際、教師はオーストラリアについて自らが抱くステレオタイプを多かれ少なかれ学生に押し付けることになるが、教師が自分で授業を組み立てる以上それは避けられないことであろう。しかし、ダリアンスミス助教授の午前中の全体講演でも指摘したように、若い世代を教える教育者としては、ステレオタイプを生み出す原因となる情報・資料などを、注意深く選別して学生に提供していく必要があること

は言うまでもあるまい。

結局、重要なのは、提供した映像について学生に自分の頭で考えさせることに尽きよう。冒頭でも触れたように、ある外国について教える場合、いかに珍しいか、いかに違っているのか、ということ強調するのは一つの方法であろうが、もう一つ有効な手法として、自分たちといかに共通する部分があるのか、という点を指摘するやり方がある。これは筆者が日頃教室で実践していることだが、日豪の歴史的展開や社会状況を比較すると、文化的基盤の大きな相違にもかかわらず、両国の間には意外なほど共通点があることに気づく。例えば、オーストラリアのヒーローとは、絶望的な早魃の下で何百頭もの羊を無事守り通した名も無き牧場主である。その点、日本での「プロジェクト X」への根強い人気に通じている。今から20年余り前にインドシナ難民の受け入れを始めた頃、日本が同時に移民の受け入れを全面的に開始していたらどうなったか、という点に思いを巡らせれば、1947年に大量移民導入計画を開始したことが、後の白豪主義の終焉に直接繋がるような極めて大きなインパクトをオーストラリア社会に与えたことは容易に想像できよう。歴史の暗い側面ばかり強調しすぎるとして「喪章史観」(black armband history)と一部から批判される、アボリジナルの迫害などオーストラリアの過去の評価をめぐる論議は、そのまま従軍慰安婦など日本の「歴史的負債」に通ずる問題でもある。実際、コーヒーブレイクのときの立ち話にその辺を指摘したら、ダリアンスミス助教授は「比較研究したらとても面白そうね」と、大いに乗り気であった。日豪両国の共通点・相違点を等しく抽出することによって、様々な角度からの比較を通じた、より深い相互理解・発見を導くことが期待できよう。

最後に、映像を通じてオーストラリアを教えるという一見単純なテーマから発展して、異文化教育の真髄に迫る奥深い問題を考える良い機会を提供してくれた、ダリアンスミス助教授とアレクサンダー博士に改めて感謝の意を表したい。